

吉田精一著

自然主義の研究 上卷

東京堂出版

著者略歴

明治41年11月東京に生る。府立三中、一高をへて東京大学文学部国文科卒業。現在東京大学教授、東京教育大学教授。著書：近代日本浪漫主義研究、明治大正文学史、芥川竜之介、永井荷風、新日本文学史序説、日本近代詩鑑賞等。



昭和三十年十一月三十日 初版発行
昭和四十三年十一月三十日 十一版発行

自然主義の研究 上巻

定価 一八〇〇円

著者 吉田 精一

発行者 岩 出 貞 夫
東京都千代田区神田錦町三の五
株式会社東京堂出版代表者

印刷者 川 口 央
東京都港区芝三田豊岡町八

発行所 株式会社 東京堂出版
東京都千代田区神田錦町三丁目五番地

電話東京(三)八二二六―七
振替東京二七〇番

印刷 図書印刷 製本 渡辺製本

序

自然主義の近代文学史上に占める重さは、ヨオロッパと日本とでは、相当にへだたりがあるやうに見える。自然主義の作家といふべきフランスに於ても、その近代文学史はおしなべて自然主義をさして重視しない。且つ又一つの文学運動としての専門研究書は必ずしも多くない。バルザック、フロオベール、ゾラ等の個人研究の盛んなのにくらべて、「自然主義研究」と題するものはまことに寥々たるものである。これも一つには自然主義に対する評価の然らしめるところであらう。

だが日本に於ては、自然主義のもつ比重は甚だ大きい。自然主義は即ち近代文学の基本であり、自然主義によつてはじめて近代レアリズムの文学、ことに小説、戯曲、評論などの基礎が置かれたといつてよいのである。はつきりとした旗じるしをかけた文学運動としてのそれは、明治三十九年前後から僅々十年に満たないとしても、その代表作と目されるものは、大正初、中期より昭和期にまで及び、その影響に至つては、今日なほそれから脱け出ることの如何が問題になつてゐるほどである。

ここに同じ自然主義の名を冠しながら、かんとんに西洋のそれと等置すべからざる理由がある。且つ又その内面的特色にも相当の距離があつて、これを単にヨオロッパのものの模倣とか、誤解とかで片付けること

は當を得てゐない。むしろ西欧の模倣を脱し、それと違つた日本自然主義を樹立しようとした点に、当年の作家や評論家の努力があつた。その結果が、日本の風土に根を据ゑた近代文学の大もととなつたのである。

このやうな意味で、自然主義は日本の近代文学を研究する者の第一の對象となるべきものであるが、これにふれた評論類は多いにせよ、真に根底からその成立過程を洗ひ、実証的に意義と位置を闡明した研究書はまだないといつてよい。私が自然主義の研究に志した理由の一はここにある。

私はこの書に於て、作られたものとしての自然主義を客觀的に解析することよりは、(それも一つの研究態度である) 發生的にその成立の源由をたどり、方向を追ひ、作られて行つた過程に於てそれを眺めようとした。そのためには第一部に於てそれに多少とも影響したと見られる周辺の文学をとらへ、自然主義に直接關係のないと見える方面にも筆を及ぼした。それは一言でいへばレアリスムの發展過程に於て自然主義をとらへる作業に外ならない。然しもしこの方向に徹底しようとすれば、縦には明治二十年前後、即ち「小説神髓」以後からはじめて昭和の現代まで筆を延ばすを要する。しかしそれは近代文学史を書くことになるので、しばらくその對象を自然主義時代を中心とし、その成立に参与した面に限つて簡単に触れることにとどめたのである。

近代文学の研究はちかごろ甚だ盛んであるが、なほ科學的研究としては啓蒙期を脱せず、自然主義の諸大家についても、藤村を除けば全集すらも甚だ不完全で、資料を博渉するには多くの努力を要する。個人研究としても、拠つて以て従ふべき動かない研究は甚だ稀である。実は「自然主義の研究」といふやうな題目は、

それらの個別的の研究が完成された上にはじめて果されるものといつてよい。されば私のこの書の如きは過渡期的な性格のものであり、ここにとりあげた各部、各章、各節はそれぞれ一冊の単行本としての独立した将来の研究を待つのである。私としては出来るだけ事実在即し、実証につき、事実の意味を拡大することによつて、客観的正確性を失はないやうにとめたつもりであるが、なほ個人の能力には限りがあり、新しい資料は現在も手許に増えつつある。勿論私自身毫もこれを決定的なものと思惟してゐないが、ただ、自然主義に對する綜合的研究書として、一応まとめて世に示すことも意義があると考へたのである。近ごろ頼に輩出した新進有能の近代文学研究者が、確實に実証を踏まへて在來の所説を破り、鋭い新見を立てる状況は、私の甚だ心強く思ふ所であるが、この書の如きも啓蒙書の一として、批判にさらされ、妄斷を追求される日の近いことを切に期待したい。

叙述に當つて直接に抛り、もしくは参照した論文著書は文中に摘録したが、なほ参考にしても文中にひかなかつたものに限る、章末にまとめてかかげた。それは直接この書をなす場合に参考したものに限るのであつて、これ以外に幾多の優秀な研究や論文が存在するのを否定するものではないから、その点読者の諒解を得たい。なほ自然主義の成立に關与しても、上巻に於てとりあげず、叙述の都合上下巻にゆづつたものもある。「写生文」の如きがその一つである。他にもこの種のものがあるので、それらについては下巻を合はせ見られることを希望する。

私が自然主義の研究に本格的に着手したのはここ六、七年であるが、思へば二十数年間、高等学校入学以

後主として親しんで来た外国文学はフランス近代のそれであり、ことに自然主義系統のそれであつた。東大入学後も亦縁あつて辰野隆、故山田珠樹両教授の「フロオベール研究」「ゾラ研究」の講義を各二年にわたつて聴講するを得た。まだ本郷にあつた一高図書館にゾラの著書がかなりあつた所から、暇をぬすんでそこで幾つかの長篇に読み耽つたのも、今はなつかしい思ひ出である。もとより専門外の私の知識や理解は浅いにせよ、自然主義を研究することになつた、若干の因縁をそこに感じないではない。

最後にこの稿は東大文学部での講義草稿の一部にもとづいてゐる点から、学生時代以後御指導をいただいた上、私にこの機会を与へられた久松潜一博士はじめ麻生磯次、時枝誠記、池田龜鑑諸博士に対し深く感謝の意を表したい。又東京堂の増山新一、浅井隆氏には、毎日のやうな督促と激励によつて、僅かにこの書の日之眼を見るに至つた恩人として、感謝するものである。両氏がなければ、懶惰な私は、なほ出版を数年の後に延ばしたかも知れない。

昭和三十年十一月

吉 田 精 一

自然主義の研究 上巻 目次

序

序論

第一部 写実主義より自然主義へ

第一章 日清戦争後のレアリズムの進展

第一節 日清戦争後の社会相

第二節 文芸評論の進展

1 理想主義の評論

2 社会小説の要望と論議

3 国家主義に立つ文芸評論

第三節 観念小説と深刻小説

1 観念小説、悲惨小説の出現とその意義

2 泉鏡花の観念小説

3	川上眉山の観念小説	七
4	広津柳浪の深刻小説	八
第四節 政治小説と社会小説		
1	政治小説に関する論議	九
2	理想なき政治小説	一〇
3	社会小説	一四
第二章 西欧自然主義の移入とその影響		
第一節 フランス自然主義の移入と紹介		
1	ゾラの移入―鷗外を中心として	一三
2	自然主義移入の態度	一五
第二節 小杉天外の写実小説		
1	「はつ姿」までの天外	一五
2	「はやり唄」以後	一五
第三節 小栗風葉の写実小説		
1	前期の風葉	一六
2	「覚醒」後の風葉	一八

第四節 永井荷風のゾライズム	一五二
----------------	-----

第三章 個人主義の深化と主観尊重の風潮	二〇一
---------------------	-----

第一節 自我主義の主張	二〇一
-------------	-----

——高山樗牛とニイチエ——

第二節 宗教的、神秘的傾向の瀾漫	二〇七
------------------	-----

第三節 自然主義概念の發展	二一三
---------------	-----

第四節 象徴主義の移入と消化	二四七
----------------	-----

第二部 自然主義文学の出版

第一章 浪漫精神	二六二
----------	-----

1 北村透谷の浪漫主義	二六二
-------------	-----

2 浪漫的心情	二六九
---------	-----

第二章 田山花袋(一)	二七〇
-------------	-----

1 感傷的自己告白の文学	二七〇
--------------	-----

2 花袋と外国文学	二七〇
-----------	-----

3 花袋の転換	二七〇
---------	-----

第三章	島崎藤村(一)	三七
-----	---------	----

1	詩人藤村	三七
---	------	----

2	詩より散文へ	三五〇
---	--------	-----

第四章	国木田独歩(一)	三六〇
-----	----------	-----

1	独歩のオリヂナリテイ	三六〇
---	------------	-----

2	「武蔵野」の詩人独歩	三七二
---	------------	-----

3	「独歩集」と「運命」	三八一
---	------------	-----

第五章	岩野泡鳴(一)	三九〇
-----	---------	-----

1	泡鳴の出発	三九〇
---	-------	-----

2	泡鳴の詩業	四〇一
---	-------	-----

第六章	徳田秋声(一)	四一二
-----	---------	-----

1	自由主義者秋声	四一二
---	---------	-----

2	秋声の展開	四一九
---	-------	-----

第七章	正宗白鳥(一)	四四三
-----	---------	-----

1	宗教から文学へ	四四三
---	---------	-----

2	批評家白鳥	四六三
---	-------	-----

第三部 自然主義確立期の周辺

第一章 日露戦争後の社会問題及び社会思想…………… 四七九

第二章 プラグマチズムの移入と消化…………… 四九二

1 プラグマチズムの移入と評論…………… 四九二

2 プラグマチズムと文学との交渉…………… 五〇〇

第三章 文芸上の新環境…………… 五〇九

1 発表機関と集団…………… 五〇九

2 ロシア及び北欧文学の移入…………… 五二六

自然主義の研究
上卷

序論

日本近代文学史上に於ける写実主義の主張は、坪内逍遙の「小説神髓」(明治一八年)によつてはじまつたが、それが急速に封建体制からキャピタリズムにかけ上つて行つた時代の要求に即応して、近代小説の方向を大体に於て正しく指摘したものであることはいふまでもない。資本主義社会、もしくは市民社会の發展——確立期にあつて、小説の方向が写実に向ふことは、ヨーロッパの文学史に徴しても知られるが、その根底には、近代社会の特色たる実証的精神が据つて居り、文学に於ける写実主義も、この精神の一つの表現に外ならない。

〔実証的とはどのやうなことであるか。実証哲学の建設者コンテ(A. Comte)は「実証精神論」(Discours sur l'esprit positif)の中で、1 架空(chimérique)に対するものとしての現実(réel)、2 無用(oiseux)に対するものとしての有用(utile)、3 不定(indécision)に対するものとしての確実(certitude)、4 曖昧(vague)に対するものとしての精密(précis)、5 否定、消極(négatif)の反対としての組織、建設(organiser)、6 絶対(absolu)の反対である相対(rélatif)の六義とした(第三章第一節)。この現実的、実用的、具体的、合理的、科学的、相対的な精神が、封建制度打破ののちの市民社会を築き、且つ市民社会を基礎づけたのである。明治時代の思想、哲学、文学の底流をなすものは、封建精神の形式主義、伝統主義の呪縛と対蹠するこの実証精神であつた。それは

ことに啓蒙思潮の特色をなすものであつて、色合の違いこそあれ、福沢諭吉の思想にも、井上哲次郎の哲学にも、徳富蘇峰の「国民之友」にも、三宅雪嶺の「我觀小景」や「宇宙」にも、黒岩涙香の「天人論」にも通じて觀取されるのである。

しかし近代的な市民社会をめざして發足したとはいへ、明治社会そのものは、諸家の説にあるやうに眞の市民社会といふよりは絶対主義的色彩が濃い。政治的封建制は打破されても、社会的封建制は多少とも残存した。フランス革命とは違ひ、明治維新は徹底した市民革命ではなかつたから、眞の自由主義は獲得されず、個人の家族の羈絆及び王統国家の羈絆からの解放はまだであつた。ことに思想や芸術の方面に於ては古い時代の伝統は中々消えず、知識としては頭の切りかへは出来ても、感情の方面では封建的なものをすっかり切りかへるといふわけには行かなかつた。

眞の市民精神の特色として、ある学者は1無限追求の意欲、2徹底した自己意識、3プラクチカルであること（金子武蔵「市民社会の倫理」昭和二年八月「展望」所載）。だが明治の日本の場合、無限追求の意欲は、「家族国家」の制度と抵觸する分野に於ては思想上の拘束にあひ、限界を感じざるを得なかつた。徹底した自己意識には、家族制度の束縛があつた。絶対主義体制は、市民社会の個人主義精神に、なほ限界を附してゐたのである。

それにしても明治社会の標準階級が、ミドル・クラス・ソサエティ中流市民であり、その利害を基準として、發展したことは疑ひをいれない。明治初年に於て、江戸時代の貴族（大名）士、卒をのぞく農商工、即ち平民は、全人口の九三％を越えてゐた（平野義太郎「日本資本主義社会の機構」）。これらの封建制度の不自由な桎梏から脱した明治人の大多数は、

多くは、自己の生活をいとなみ、思想を表現する上に、比較的な自由を感じることに満足したのである。さうしてこのやうなブルジョアジイの上昇過程に於けるわが国の特殊性として、西欧の文化を規範とする啓蒙思潮の志向は、強弱の差はあれ、殆ど明治の全時代にわたつて存在した。それとともに個人の自由な解放と、国家権力からの解放を祈願する浪漫主義の精神はそれに平行して起り、更にブルジョアジイの急激にキャピタリズムに進んで行く過程に於て現実主義の要求がおこつた。この三者は時代精神の表現たる文芸にもそれ〴〵反映してゐる。

この内ロマンチズムは外国の文学史にあつては、十八世紀の啓蒙思想や合理的精神に反動する非実証主義的な運動として位置づけられる。けれども、わが国に於けるそれは、勿論ロマンチズムといふ名称を共通するやうに、空想的、非現実的な志向をも含むけれども、又一面に於て個我の覚醒にもとづく、個人の内面的眞実を現実的に追求しようとする声であつた。従つてたとへばドイツのロマンチズムに見るやうな無限なるものへの強烈な憧憬や、壮大にして又空漠たる夢想にとぼしく、ある時代を代表すべき集团的文学運動としての力は微弱であつた。それは政治上の自由主義が十分に達成されず、市民社会が完全な形で出来上らなかつた事情と合致するものがある。

とにかく、啓蒙思潮がまだ強力な意義をもち、浪漫精神が発芽期にある時期に、すでに文学精神及び方法上のレアリズムが要求され、この三者が殆ど同時的存在として發展したことは、明治十年代から三十年代にかけての、特殊な時代相を語るものであつた。一体写実主義とは、平俗にいへば、現実をよく注意しそれを観察することを主にする傾向であるが、この種のものは平板な形相では、江戸時代の風俗小説にすでにあらはれてゐる。洒落本や滑稽本、ことに三馬の「浮世風呂」や「浮世床」は限定された意味での写実小説である。もしそれが明治以後